「キャリア心理学セミナー」に関する授業研究　第２報
－学生評価から見た専攻コア・カリキュラムの教育効果－

The study of teaching seminar in career psychology: The second report
-The evaluation of the educational effect of the core curriculum by students at Otsuma Women's University-

西河　正行[1]，向井　敦子[1]，八城　薫[1]，古田　雅明[1]，香月　菜々子[1]，
福島　哲夫[1]，加藤　美智子[1]，田中　優[1]，堀　洋元[1]
[1]大妻女子大学人間関係学部人間関係学科社会・臨床心理学専攻

Masayuki Nishikawa[1], Atsuko Mukai[1], Kaoru Yashiro[1], Masaaki Furuta[1], Nanako Katsuki[1],
Tetsuo Fukushima[1], Michiko Kato[1], Masashi Tanaka[1], and Hiromoto Hori[1]
[1]Faculty of Human Studies, Otsuma Women's University
2-7-1 Karakida, Tama-shi, Tokyo, Japan 206-8540

キーワード：心理学教育，教育効果，学生評価
Key words：Psychology education, Educational effect, Students' evaluation

抄録

本稿は，社会人基礎力育成を目指す「『キャリア心理学セミナー』に関する授業研究」の第 2 報である．まず，育成するスキルと教育方法との関連を整理し，次に，現行カリキュラムの教育効果に焦点を当て，学生がスキル獲得をどのように認識しているかを調べた．昨年度卒業の 4 年生に実施した調査結果から，学生自身の評価を見ると，「論理的思考力」「協調性」「傾聴力」「責任感」などのスキル獲得についてはかなり満足度が高いことが分かった．一方，教員側から見て，将来にわたるキャリア発達のためには，特に，社会への主体的関与の重要性を，今後さらに学生に認識させていく必要性が明確になった．なお，今回の知見が他学年の評価とどの程度共通するかなど，本年度，現 4 年生から 2 年生に対する質問紙調査で明らかにしていく．

１．はじめに

大妻女子大学人間関係学部・社会・臨床心理学専攻（以下，本専攻と略す）では，学生のキャリア発達を視野に入れたキャリア支援を目的に，2013 年度入学者から新規必修科目「キャリア心理学セミナー」を大学 3 年後期に開講することとした．そして，2012 年度から大妻女子大学人間生活文化研究所より研究助成を受けて授業研究を行い，西河ほか[1]にまとめた．本稿は授業研究の第 2 報として，本専攻のカリキュラムの特徴と教育目標を示した上で，「キャリア心理学セミナー」の位置づけを明確にする．続いて，昨年度に実施した質問紙調査の結果の一部を報告し，次年度の研究課題を述べる．

なお，本研究はその初期段階として「キャリア心理学セミナー」の授業研究（授業内容と方法の確定）を行うことを目的とするが，最終的には専攻の FD 活動としてキャリアの観点から心理学教育と職業・就職指導の PDCA サイクルを検討し，カリキュラムの再構築の方向性を見出したいと考えている．さらに言えば，本研究は，将来的に本学の就業力 GP「質量両面の就業力向上のためのキャリア教育」における「学習ポートフォリオ」作成支援をより充実・深化させるプログラムとして提案できる可能性があるだろう．

２．現行コア・カリキュラム構造の特徴と教育目標との関連

2.1.　カリキュラムの構造とその特徴

本専攻における現行のコア・カリキュラムの構造は図 1 の通りであり，その教育内容と教育方法

の特徴は，以下のようにまとめられる．
1)教育内容の特徴；社会心理学と臨床心理学をバランスよく体系的に学ぶ
2)教育方法の特徴；
・初年次教育の重視（高大接続・教育の充実化）
・積み上げ式のコア・カリキュラム（アクティブ・ラーニング志向）
・グループワーク・討論を演習に多用（自己表現力，傾聴力の育成）
・卒業論文の作成（論理的思考力，プレゼン力）
・専任によるチームティーチング

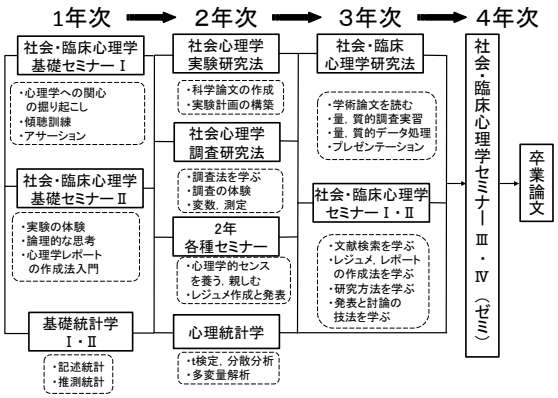

図 1.　現在のコア・カリキュラムの構造

2.2.　教育目標との関連

本カリキュラムを通しての教育目標は，経済産業省の提唱する社会人基礎力に対応した，以下に示す 3 つのジェネリック・スキルの育成である．

1)論理的思考力
2)コミュニケーション力
3)ビジネススキル

そして，本カリキュラムの特徴とそれを実現するための教育方法との関連を示すと，表 1 のようになる．

すなわち，3 つのスキルを育成するために，1 年次から 3 つの側面で基礎的な教育を行っている．「論理的思考力」は心理学教育の根幹ともいえる心理学研究法の学習を通して，また「コミュニケーション力」はグループワークを通して，それぞれ育成を図るカリキュラムとなっている．特に，専任によるチームティーチングがこれらの教育を支えていることも特筆すべき点である．また，「ビジネススキル」については，1 年次からレポート作成を多く経験させることを通して，自ずとワード，エクセル，パワーポイントなどのスキルが身に付くようにしている．

次節では，新カリキュラムにおける「キャリア心理学セミナー」の位置付けならびに授業の目的を明確にしていく．

表 1.　育成するスキルと教育方法との関連

育成するスキル	初年次教育の重視	積み上げ式カリキュラム	グループワーク・討論	卒業論文作成
論理的思考力	心理学基礎の学習	心理学研究法の学習		問題を発見し、課題を明確化し、データを収集分析し、結果を考察する一連の過程を身に付ける。
コミュニケーション力	傾聴訓練・アサーション訓練		グループ作業による学習	レポート作成、プレゼンテーション訓練、教員との連絡・相談・報告
ビジネススキル	レポート作成・ワードの習得	文書作成・レポート作成・ワードとエクセルの習	レポート作成・データ処理・SPSSとパワーポイント習得	

3．キャリア心理学セミナーの新カリキュラム上の位置づけと前に踏み出す力の育成との関連

3.1.　新カリキュラム上の位置づけ

西河ほか[1]に述べたように，新設のキャリア心理学セミナーは，新カリキュラムにおいて 3 年次後期に専任教員が担当する必修科目として位置づけられることとなった(図 2)．現カリキュラムは，2 年次の必修の負担が偏っており，また専任がチームティーチングするのは 3 年前期の社会・臨床心理学研究法までであった．そこで現カリキュラムの 2 年次各種セミナー（図 1 参照）を，社会・臨床心理学基礎セミナーⅢ（2 年次必修，専任教員 3 人体制）に改編し（図 2），より多くの研究手法を体験し，各学生の個性を生かした，独創的な卒業論文の作成を下支えする内容への変更を検討

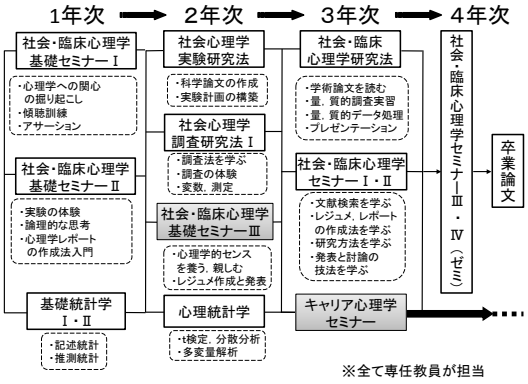

図 2.　新コア・カリキュラムの構造

している．

このように各種セミナーをスリム化した分をキャリア心理学セミナー（3 年次必修，専任教員 3 人体制）に充てたのである．

この改編により，殆どのコア科目で専任教員によるチームティーチングが行われることとなり，2 年次までの社会・臨床心理学基礎セミナーはⅠ・Ⅱ・Ⅲとして，連続性と一貫性が強化されるだけでなく，3 年次後期のキャリア心理学セミナーまでゼミ以外の授業で専任教員が学生を教育する体制となった．

3.2.　前に踏み出す力の育成

上述した大幅なコア・カリキュラム改編の背景には，長年の FD 活動等を経て，本専攻学生の「自信のなさ」という問題点に焦点があてられてきたことがある．例えば，論理的思考力，共感性・協調性，実務処理力のある成績優秀な学生であっても，逆にコア・カリキュラムを消化できないような学生であっても，共に自信を失っている点では共通しており，心理学での学びをキャリアに活かしきれてないように思われた．そこで，本専攻の学生に現在必要とされるものは「前に踏み出す力」であり，カリキュラムでその力を育成するシステムを組み入れる必要性が指摘されたのである．

その意味で，キャリア心理学セミナーの目的は，本専攻の学生の特徴を見据えた，学生の意欲を引き出すキャリア支援にある．さらに，学生のキャリアという観点から専攻での専門教育を見直すことにより，学生一人ひとりが生涯にわたって質の高いキャリアを形成・維持できるようなカリキュラムに改善していくことである．換言すれば，キャリア心理学セミナーの新設は，就職活動のためのスキルアップが目的ではなく，心理学教育をベースに生涯発達の観点から学生のアイデンティティ形成をサポートし，学内外のキャリア支援プログラムに通底する基礎を作ることにある．

4．質問紙調査

4.1.　調査の目的

前述した問題意識を元に，キャリア心理学セミナーの具体的な授業内容を検討する基礎資料として，現行コア・カリキュラムで学んだ（学んでいる）学生が教育効果をどのように評価しているかを把握することを目的とする質問紙調査を行った．

質問紙調査では，「前に踏み出す力」は，積極性，主体性，責任感，リーダーシップ，発信力，自信，創造力，計画力，実行力などさまざまな側面から捉える．さらに，「論理的思考力」については，考える力，課題発見力，問題解決力，情況把握力，「コミュニケーション力」については，発信力，他者をフォローする力，傾聴力，協調性，忍耐力，柔軟性，ストレス・コントロール力，「ビジネススキル」については，書く力，プレゼンテーション力，パソコン操作力などを測定する．

本稿ではこれらの調査のうち，まず，授業内容と学生が身に付けたと考える技能から，授業内容の有効性を検討するため，卒業直前の 4 年生に対して質問紙調査を実施した．

4.2.　調査方法

調査方法の詳細は，以下の通りである．

調査日時；2013 年 1 月 22 日（火）．

調査対象者：社会・臨床心理学専攻 4 年生 84 名．

質問紙調査では，①心理学学習を通したジェネリックな力（論理的思考力，コミュニケーション力，ビジネススキル）の育成を学生がどのように認識しているか，②学生自身が，4 年間の学習を通してこれらのスキルをどの程度習得したかについてどのような評価をしているか，を尋ねた．

4.3.　調査結果

まず，本専攻のコア・カリキュラムの中で育成されるスキル 22 項目（表 2）について，学生自身が将来的にもどの程度重要と捉えているかを明らかにするため，「あなたが将来生きていく上で特に重要と感じる項目を 3 つ選んでください．」という質問への回答を求めた．

その結果（表 2），もっとも肯定率が高かったのは「考える力（論理的思考力）　(32.1%)」であった．続いて，「協調性（28.6%）」，「人前で話す力（プレゼンテーション力）（25.0%）」，「傾聴力（23.8%）」の順となった．この他，2 割程度の肯定率のあった項目は，「ストレス・コントロール力（19.0%）」，「責任感（19.0%）」，「問題解決力（19.0%）」であった．

他方，もっとも肯定率が低かったのは「リーダーシップ（1.2%）」と「創造力（1.2%）」であった．この他，「課題発見力（2.4%）」や「書く力（3.6%）」「パソコン操作力（3.6%）」も 5%以下となった．この他 10%に満たない項目は，「計画力（6.0%）」，「他者をフォローする力（7.1%）」，「主体性（7.1%）」

であった．

次に，本専攻のコア・カリキュラムの中で育成されるスキル 22 項目について，学生自身が 4 年間でどのくらい身に付いたと評価しているかを明らかにするため，「(4 年間の本専攻の必修科目を受講して）あなたはどのような力や技能が身についたと実感していますか？」という質問への回答を求めた．回答は，「身についた」「やや身についた」「どちらともいえない」「あまり身につかなかった」「身につかなかった」の 5 件法で求めた．

その結果（表 3），もっとも身についたと考えている項目は「傾聴力」で，56.0%が「身についた」と回答していた．この他，「身についた」と回答した割合が高かったのは，「協調性（47.6%）」，「パソコン操作力（42.9%）」，「考える力（論理的思考力）（41.7%）」，「書く力（文章作成力）（38.1%）」，「責任感（36.9%）であった．

一方，「どちらともいえない」「あまり身につかなかった」「身につかなかった」という回答が相対的に多かった項目は，「リーダーシップ」，「ストレス・コントロール力」，「自信」，「創造力」，「課題発見力」であった．

表2．将来生きていく上で重要と考えるスキル
（n=84，％）

本専攻の授業の中で育成されるスキル		肯定率(%)
論理的思考力	計画力	6.0
	考える力(論理的思考力)	32.1
コミュニケーション力	リーダーシップ	1.2
	他者をフォローする力	7.1
	協調性	28.6
	発信力(アサーション力)	10.7
	傾聴力	23.8
	忍耐力	14.3
	柔軟性	13.1
	ストレス・コントロール力	19.0
	書く力(文章作成力)	3.6
	人前で話す力(プレゼンテーション力)	25.0
前に踏み出す力	実行力	13.1
	主体性	7.1
	自信	16.7
	責任感	19.0
	積極性	11.9
	創造力	1.2
ビジネススキル	パソコン操作力	3.6
	課題発見力	2.4
	問題解決力	19.0
	情況把握力(情報収集力・状況把握力)	14.3

5．考察

以上の結果は，3 つの角度から意味を読み取ることができよう．第 1 に，学生が将来生きていく上で何を重視しているかであり，教育する側の認識とそれが一致するかという点である．第 2 に，学生自身が重視している項目について，どの程度のスキル習得ができたかという点である．第 3 に，教員から見た場合，学生のスキルの達成度はどのように評価されるかである．

5.1.　学生と教員の認識のズレ

第 1 については以下のようであった．

表 2 に示すように，学生が重視する項目は，「考える力（論理的思考力）」であり，「計画力」の重要性の認識は低かった．つまり，教育する側から見ると，論理的思考力が必要であるのは，生きていくことを含めて計画的に物事を進めていくためであるが，学生にはその関連の認識が明確になっていないと考えられる．

コミュニケーション力について，学生は「協調性」，「人前で話す力（プレゼンテーション力）」，「傾聴力」「ストレス・コントロール力」について重視しているものの，「他者をフォローする力」，「書く力」，「リーダーシップ」については重視していなかった．つまり，学生にとってのコミュニケーションは協調性や傾聴であり，リーダーシップやフォロワーシップのように主体的に他者に関わるものではない可能性がある．

前に踏み出す力については，「責任感」「自信」が重視され，「主体性」，「創造力」についての認識は低かった．つまり，責任感はあるものの，主体的な関与の重要性が認識されていない点に問題が残る．

ビジネススキルについては，「問題解決力」，「情況把握力」の重要性の認識はあるが，「課題発見力」が重視されていなかった．ビジネス場面では問題解決の前に，課題発見が重要であるが，その点の認識は弱いと言えよう．一方，「パソコン操作力」については，パソコンを操作することとビジネスとの直接的関係をイメージできていない可能性がある．

5.2.　学生が重視する項目の達成度

表 3 に見るように，学生が重視する項目，特に，「もっとも身についた」と考えている項目について，彼らがどの程度達成したかを見ると，以下の通りであった．

論理的思考力の中の「考える力（論理的思考力）」，コミュニケーション力の中の「協調性」，「傾聴力」，前に踏み出す力の中の「責任感」は比較的達成感が高かった．逆に，重視しているのに身につかなかったと回答しているものは，コミュニケーション力の中の「ストレス・コントロール力」だけであった．このように，学生が重視していた項目の多くは学生自身が卒業時には達成したと肯定的に評価していると言えよう．

一方，「身につかなかった」「あまり身につかなかった」という回答率に着目すると，コミュニケーション力の中の「リーダーシップ」，「ストレス・コントロール力」，前に踏み出す力の中の「自信」，「創造力」，ビジネススキルの中の「課題発見力」であった．「ストレス・コントロール力」，「自信」については学生自身にも身についていないと感じる自覚があるともみなせよう．なお，それ以外は学生が重視していない項目と重なっていた．

5.3.　教員が重視する項目の達成度

学生は重視していないが教員としては必要と考える項目の達成度を，表 3 の「やや身についた」「身についた」の回答を合わせて検討すると次のようであった．

論理的思考力の中の「計画力」，コミュニケーション力の中の「他者をフォローする力」，「書く力」，前に踏み出す力の中の「主体性」，ビジネススキル

表3．スキル習得の肯定率（n=84，％）

本専攻の授業の中で育成されるスキル		身につかなかった	あまり身につかなかった	どちらともいえない	やや身についた	身についた	無回答
論理的思考力	計画力	1.2	14.3	20.2	47.6	15.5	1.2
	考える力（論理的思考力）	–	1.2	7.1	48.8	41.7	1.2
コミュニケーション力	リーダーシップ	6.0	23.8	33.3	28.6	7.1	1.2
	他者をフォローする力	–	4.8	9.5	60.7	23.8	1.2
	協調性	–	3.6	6.0	41.7	47.6	1.2
	発信力（アサーション力）	–	8.3	26.2	47.6	16.7	1.2
	傾聴力	–	2.4	1.2	39.3	56.0	1.2
	忍耐力	–	14.3	15.5	48.8	20.2	1.2
	柔軟性	2.4	3.6	28.6	48.8	15.5	1.2
	ストレス・コントロール力	6.0	20.2	32.1	23.8	16.7	1.2
	書く力（文章作成力）	1.2	2.4	7.1	50.0	38.1	1.2
	人前で話す力（プレゼンテーション力）	–	13.1	28.6	39.3	17.9	1.2
前に踏み出す力	実行力	–	15.5	22.6	41.7	19.0	1.2
	主体性	1.2	11.9	26.2	45.2	14.3	1.2
	自信	13.1	22.6	25.0	29.8	8.3	1.2
	責任感	–	7.1	11.9	42.9	36.9	1.2
	積極性	–	16.7	22.6	46.4	13.1	1.2
	創造力	8.3	23.8	33.3	23.8	9.5	1.2
ビジネススキル	パソコン操作力	1.2	3.6	9.5	41.7	42.9	1.2
	課題発見力	–	22.6	31.0	34.5	10.7	1.2
	問題解決力	1.2	11.9	33.3	40.5	11.9	1.2
	情況把握力（情報収集力・状況把握力）	1.2	4.8	20.2	52.4	19.0	2.4

の中の「課題発見力」,「パソコン操作力」の達成度は 45%から 90%近くあり，コミュニケーション力の中の「リーダーシップ」，前に踏み出す力の中の「創造力」は達成度が特に低く認識されていた．

ちなみに，学生の自己評価で 60%に届いていないものを，スキル別，低い順に列挙すると，コミュニケーション力の中の「リーダーシップ」,「ストレス・コントロール力」,「人前で話す力（プレゼンテーション力)」，前に踏み出す力の中の「創造力」,「主体性」，ビジネススキルの中の「情況把握力」,「課題発見力」,「問題解決力」ということになる．

６．まとめ

今回，2012 年度卒業の 4 年生に卒業直前に実施した質問紙調査の結果の一部を元に報告した．具体的には，学生自身が，本専攻のコア・カリキュラムについて，授業内容と身に付けた力・技能との関連をどのように評価しているか，つまり，授業内容の有効性を検討した．

その結果，学生自身の目から見ると，スキル獲得についてはかなり満足度が高いことが分かった．一方，教員側から見ると，以下のように，今後，学生に認識させていかなければならない点が明確になった．まず，学生は論理的思考力を文字通り「考える力（論理的思考力)」としてしか捉えておらず，何のための論理的思考力かという認識がないように思われた．次に，コミュニケーション力は主体的にコミュニケーションをはかると言うよりは，周囲の人に合わせるという同調傾向を表している．リーダーシップやフォロワーシップのように主体的に他者に関わる点は重視されておらず，身についたという評価も受動的な範囲にとどまっているように思われた．さらに，前に踏み出す力についても,「主体性」,「創造力」の重要性の認識が低く，自ら問題を展開させようという意欲と結びついていない結果である．自己の枠を打ち破るような主体的関与の重要性を啓蒙・教育していく必要性が認識された．この点に関しては，学生自身の評価でも「リーダーシップ」,「ストレス・コントロール力」,「自信」,「創造力」,「課題発見力」は身についたとは評価されておらず，学生自身にも一定の自覚はあるように考えられる．

これまでの検討で本専攻学生の問題点として「学生の自信のなさ」が取り上げられたが，それを裏付ける結果となったと言えよう．

おわりに，本年度，現 4 年生から 2 年生に同じ質問紙調査を実施する予定である．この調査を通して，今回，4 年生で得られた知見が他の学年ではどのように評価されているか，また，学年を経ることでスキル獲得の認識がどのように変化していくのか，また，それらの変化を生じさせる心理学的な要因は何かなどを検討する必要がある．

今年度から 2 ヶ年は，以上の追加調査を行い，それらの分析結果を踏まえた上で，実効性のあるキャリア心理学セミナーの授業を具体的に構築していく予定である．

謝辞

調査に協力してくださった社会・臨床心理学専攻学生の皆さんに記して感謝申し上げます．

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所「共同研究プロジェクト」（K 076）の助成を受けたものである．

引用文献

[1] 西河正行・向井敦子・八城薫・古田雅明・香月菜々子・福島哲夫・加藤美智子・田中優・堀洋元（2012)．「キャリア心理学セミナー」に関する授業研究　第一報－専攻カリキュラムにおける位置づけと授業の目的－，大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究，14，35-42.

[2] 島本好平・石井源信（2006)．大学生における日常生活スキル尺度の開発, 教育心理学研究, 54, 211-221.

Abstract

This is the second report from the study of building up the new teaching seminar in Career Psychology, which is designed for undergraduate students to cultivate fundamental competencies for career development.

To begin with, we visualized the relationship between those and running curriculum. Therefore, the present study focuses onto the educational effects of running curriculum, to see how students realize their educational achievement by taking several seminars.

According to the survey with the senior students, the curriculum has been well appreciated since it was helpful to learn and develop fundamental competencies such as 'logical thinking', 'cooperative attitudes', 'skilled listening' and 'sense of responsibility'. Although these students rather felt positive and satisfied with these outcomes, teaching staffs including professors are requesting them to be more positive and aggressive to make contributions to the social relationships by themselves, in order to succeed in their career.

The further discussion will be continued in the next report, by conducting the following survey with the different age groups such as sophomores and juniors.

（受付日：2013年6月15日，受理日：2013年6月25日）

西河　正行（にしかわ　まさゆき）
現職：大妻女子大学人間関係学部教授

慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程単位取得満期退学.
専門は臨床心理学．主に，学生相談と心理検査について研究を行っている．また，現在，社会・臨床心理学専攻教員とともに，学生の生涯発達を見据えた心理学教育のあり方を模索している．
主な著書：大学生における精神的不適応予防に関する研究（共著，風間書房）